

身体の汚れを洗い落そうと入った風呂場の中で、雅美は秘部に鈍い痛みを覚えた。石鹼をまぶした手で、激しい自慰の行為によって赤く脹れた秘部を十分に時間をかけて丁寧に洗っていく。

薔薇の香りがするきめ細かい石鹼の泡に下腹部が包まれ、その泡の中で彼女の細い手指が動く。鈍い痛みが次第に別のものに変質し、その動きに淫らなものが見えはじめる。

だが彼女はすぐにその手を止めた。

自慰による快樂は、本当には満足出来るものではないことを、彼女は悟っていたのだ。

脱衣場に出た時、雅美は床に寝そべっているエンプーサの姿を見る。

エンプーサはまるで彼女を待ち受けていたかのように立ち上がり、足元に歩み寄ってくる。そして黒猫は、その感情の欠如したような瞳で雅美を見上げた。

彼女がエンプーサの銀盤のような瞳を見る。下着を取ろうとしていたその手が止まった。

雅美が全裸のまま脱衣所のドアを開け、廊下に出ていく。

素足のまま廊下を歩きはじめた彼女に、エンプーサがまるで付添うかのように歩調を合せて、その傍らに付き添う。

彼女が、彰子の寝室の前で立ち止まった時、身を屈めてエンプーサを抱き上げた。裸の乳房にエンプーサのビロードのようになめらかな毛皮が触れ、そして彼女は黒猫を腕のなかに抱かかえる。

雅美が彰子の寝室のドアを開く。

浅い眠りについてた彰子が、ドアの開く音に目を覚ます。

ベッドの上から入り口に立つ雅美に、まだ半ば眠りの中にある声で囁く。

「雅美ちゃん？ どうしたの……」

そして彼女が全裸である事を見て取ったとき、彰子は完全に目を覚ました。

「貴方、裸じゃないの……」

彰子と雅美が、互い視線を絡ませ合い、そして彰子は、雅美の胸に抱かれたエンプーサと、彼女の瞳の中に浮かぶ欲情の火を見る。

彰子の脳裏に、ほんの数時間前の、彼女との淫らな行為が蘇る。

彰子が妖艶な笑みを浮べる。

雅美がエンプーサを抱いたまま、ベッドに歩み寄ってくる。彰子が身体に掛けていた毛布を大きく開く。

「おいで……」

彰子が囁いた。

彰子に歩み寄っていく雅美の腕の中から、エンプーサが飛び出し、床に降り立つ。

屈み込んだ雅美が、彰子の頬に手を掛け唇を合せた。

絡み合おうとする二人の女の姿態を、床に寝そべったエンプーサが見詰めている。

雅美の唇が、細い唾液の糸を引いて、彰子の半開きとなった唇から離れた。

彰子が少し驚いたような表情で、雅美を見る。それは、いつもよりも雅美の口付が積極的のものであった為だった。そして彰子はその事について何かを言おうとした時、既に雅美は、彼女の乳房の先端に唇を当て、乳首を舌尖で愛撫しようとしていた。

雅美に強く乳首を吸われると、彰子が低く息を吐き、瞳が半ば閉じられる。

早くも尖りを見せはじめた彰子の乳首を舐め上げながら、雅美はそこに軽く歯を当てる。もう片方の手は彰子のもう一つの乳房に伸び、その乳首をつまみ上げていた。指がゆるゆると乳首を揉み、逆の乳首を噛んだ歯に少し力が加わる。

雅美は、彰子の身体をそのままベッドに押し倒し、あいた手をその下腹部に伸ばす。太股の内側をなで上げた指が、下穿きの隙間から侵入する。秘部の粘膜を、指先でかき分けられる時の感触を味わいながら彰子は、乳首に愛撫をつづける雅美に向かって囁く。

「雅美ちゃん……どうしたの貴方。今日はとつても……」

彰子の言葉に雅美が顔を上げる。その顔には、妖艶とも言える微笑が張り付いていた。

「可愛がって差し上げますわ、奥様……」

それは終ぞ雅美が、彰子に対して口にした事のない言葉であった。

雅美が、彰子のまだ濡れ切っていない膣口を探り当て、指を無理矢理にねじ込んだとき、彰子が顔をのけぞらせる。

「痛いですか？」

雅美が指を強く動かしながら彰子に問う。

「ああ、そんなにされたら……、もっと優しく……」

「でも……、ほらもう嫌らしいものが溢れてきましたわ……」

雅美が彰子の膣口の内部に爪を立て、引っ掻くようにして抜き出す。その痛みに唇を噛む彰子の前に、雅美が愛液をまとわりつかせた指を示す。

「ほら……、もうこんなに……」

雅美はその濡れた指を彰子の唇に寄せる。

「舐めるのよ……奥様。でない……」

雅美がもう片方の手で、彰子の秘部に再び触れ、肉襞の頂点でまだそこに埋もれている陰核を探り当てる。

「ここに爪を立ててあげるわよ……」

「いや、そんな事……しないで」

彰子が訴えるような瞳を雅美に向け、唇に当てられた自分の愛液で汚れた雅美の指を啜る。

雅美が問う。

「どんな味がします？」

怖れとそしてわずかばかりの欲情を滲ませる瞳を上げ、彰子が答える。

「少し塩辛いわ……」

「よくしてあげますわ……奥様」

微笑んだ雅美が、指の腹で彰子の陰核をやさしく愛撫しはじめる。包皮に包まれたその中で肉の芽がゆつくりと形を浮き彫りにしだす。

雅美は、愛撫を受ける彰子の表情を観察するように見詰め、潤いを湛えはじめた膣口に指を差し込んでいく。

彰子がぴくりと腰を動かして反応を返す。

「気持ちいいのですね？」

「ええ……。ええ、いいわ、とっても」

雅美が自分の指が潜り込んでいる彰子の股間を見る。

「奥様の嫌らしいところが、私の指をくわえ込んでいますわ、とっても淫らに……」

雅美が、これまで幾度も指で探り、精一杯に伸ばした舌先で愛撫した彰子の内側の箇所を指で触れ、こね回すように動かし、彰子の内部から強い快楽を引き出していく。

彰子が身を悶えさせ、声を漏らしはじめる。

「……奥様の中がとっても熱くなってきましたわ……。指が溶けてしまうようですわ……。ここに入るものなら何でもよいのですね奥様は、私の指でも、あの大きな道具でも、男の方のもでも」

「いや……。雅美ちゃん……。そんな事……」

雅美は、彰子の恥ずかしげな表情を見下ろし、指の動きを更に激しくする。

「凄くしたたってきましたわよ……奥様」

その雅美の言葉には、はつきりとからかうような調子と、欲情の色があった。

雅美が指を前後に動かしはじめる。

「奥様、ぴちゃぴちゃいっている嫌らしい音が、聞こえますか？ 奥様の嫌らしい穴が私の指に喜んでいる音ですわよ」

「ああ……いやっ」

彰子が顔をベッドに埋めると、雅美が再び廻る膣壁に爪を立て、そのまま少しだけ引いた。

「あっ」

彰子が顔をしかめ、唇を噛む。

「聞えますか？ 答えなかったら、貴方のここ、引っ搔いて血まみれにしてやるわよ」

雅美の口調が変わる。

彰子が驚きの顔で雅美に振り向き、その瞳を見詰める。

「どうなの？」

雅美が爪を立てたままに、指をまた少し引く。

爪が食い込む痛みにも、彰子が顔を擡めて囁くような小声で答える。

「聞えるわ……、嫌らしい音が……。聞こえますわ」

雅美が満足げな冷たい笑みを浮べ、浅く膣壁に食い込んだ爪を外す。指が再び前後に動きはじめると、彰子はすぐさま低い快樂の声を上げる。

雅美が彰子の膣口を押し開くようにして指をもう一本挿入し、親指で持ち上がった陰核に触れる。

「いくときには、教えるのよ……」

雅美が彰子に命じ、二本の指を前後に動かしはじめる。

彰子がベッドの上で身体をよじり、快樂の声と息を吐く。指の腹で愛撫される陰核が、包皮の下でこりこりとした手触りになる。

雅美は指を動かしつつけ、快樂に歪む彰子の表情と、愛液にべっとりと濡れた肉褌が乱れ、秘部がその形を歪めている様を見詰める。

雅美の指を深くくわえ込んでいる肉穴は、時折びくりと痙攣するようにその指をきつく締め付け、女の身体に刻み込まれた男の陰茎を楽しませるすべを淫らに繰り返す。

彰子が激しく身体をよじり、二つの乳房が揺れた。黒髪が白いシーツの上に広がり、乱れる。

そんな彼女を見下ろす雅美が残酷な表情となり、絶頂のきわに揺れる乳房に平手を叩きつける。

彰子が苦痛と快樂の声を上げ、更に大きく身体をよじらせる。

雅美は嗜虐の興奮による荒い息を吐きながら、片方の手で彰子の秘部から快樂を引き出し、もう片方の手で乳房から苦痛を引き出していく。

寝室の中に、繰り返される肉を打つ音が響き、彰子の乳房が赤くそまっっていく。しかし彼女は開かれた股間から愛液を垂れ落とし、そのすぐ下の傷ついた後孔までをも濡らしていく。裂けた傷口の周辺を赤く腫らすその後孔は、彼女の快樂を示すかのように、小さく窄まり、ひくひくと蠢き愛液のぬめりをその表面に広げていく。

雅美の打ち下ろす手の下で、赤い手形に手形が重なった頃、彰子がうわ言のように叫びはじめる。

「ああ、いきます、いきますわっ」

雅美は彰子の膣穴に入れ入れる手の動きを早め、固く勃起し、包皮からその先端を覗かせている陰核を指の腹で押し潰す。

彰子の腰が無意識のうちに上に突き出され、男の陰茎を深く受け入れる時の動きを見せたとき、彼女の全身が強くよじれ、手かシーツを引き裂くかのように掴む。

彰子が絶頂の声を絞り出す。

雅美は欲情しきった目でその乱れるさまを見詰め、膣を犯す指で激しく痙攣する筋肉の震えを感じる。

究極の一瞬の後、反り返っていた彰子の身体がベッドのバネを軋ませ、再び倒れ込んでいく。

絶頂の余韻の息を吐き、ぐったりとなった彼女の股間から雅美が指を抜き出す。

その濃く粘つく愛液で汚れた指を彼女は見詰め、そしてそれを唇にもっていく。

舌がぬめりを舐め取った。

雅美がベッドの上に仰向けに横たわる彰子の顔を跨ぐ。

まだ平静さを取り戻していない彰子の息が、雅美の秘部に吹きかかり、彼女はその息をもっと感じとりたいとでも言うように、両手を秘部に向け、左右に広げる。

目を開いた彰子は、目の赤く充血している内部までをむき出しにする雅美の秘部を見詰め、そこに顔を寄せていく。

舐めようと舌を伸ばしたとき、雅美がその顔に手を当て、押し止める。

「どんな匂いがします？」

雅美が彰子に問い掛ける。

「……女の……女の淫らな匂い……」

「それだけ？」

「……微かに匂いますわ、あの方の匂いが、あの方の精の匂いが……奥から匂いますわ」

「舐めたいの？」

「は……」

「どつちを？」

「両方を……。奥にまで舌を差し入れて、貴方のしたたりとあの方の精液が交じり合ったものを味わってみたい……」

「いやらしい女……」

「はい……」

雅美の手が彰子の顔から離れる。

「舐めて……」

雅美が囁く。

彰子は雅美の愛液に濡れた粘膜に舌をはわせはじめた。

雅美は、両手で乳房を揉みしだき、その乳首を指でつまみながら、秘部を這い、膣穴の中に挿入されていく彰子の舌を味わう。

彰子のゆっくりと上下する舌が、濡れた音をたてはじめると、彼女の愛液と彰子の唾液が混ざり合ったものがそこを伝い落ち、唇を濡らす。

雅美が、彰子の顔の上にある腰を少しだけ前にずらし、彼女の目前に後孔の窄まりを晒す。

「お舐め」

雅美が、そのはっきりした命令口調の言葉を彰子に言った時、既に彼女の舌はその後孔の表面に触れていた。

彰子がくすぐるように雅美の後孔を舐めると、彼女のそこはすぐに柔らかくほぐれ、やがて筋肉の輪の形をあらわにするほどに盛り上がる。

彰子は自分の唾液と、雅美の愛液を舌で塗り付け、そして窄まりの中心に舌先をこじ入れている。

雅美が、後孔を舐められる快楽を味わいながら、自分の股間に手を伸ばし、陰核をつまみ上げる。二本の指の狭間に挟み込んだ肉の芽を前後にこすり、鈍い痛みがともなう強い快楽に身体を震わせるながら、彼女は自らの手によって生じる秘部の快楽と、彰子の舌によって生じる後孔の快楽とに没頭していく。

彰子の舌が彼女の後孔の内壁を舐めたとき、彼女は大きく喘ぎ声を上げ、手が、鈍い痛みを訴えはじめている秘部の腕で、更に激しく動きはじめた。

雅美がすすり泣く声を上げる。

雅美が激しい絶頂を迎えたとき、瞳は閉じられることなく見開かれたままであった。そしてその瞬間に彼女が見ていたものは、床の上で二人の女の痴態を見詰めつづけるエンプーサの目であった。

絶頂の後の脱力感を振り切るように、雅美が股間を彰子の顔から外し、ベッドの上で横たわる彰子に覆い被っていく。そのまま彼女は、つい先程まで自分の後孔の中に差し込まれていた彼女

の舌を吸い上げ、舐めしゃぶり、次いで顔を彼女の乳房の間に埋める。

彰子の手が、雅美の背中に回され強く抱しめる。

雅美が、口の中で固く尖りだした彰子の乳首と、柔らかな乳房に歯を立て、強く噛む。彰子は低いうめきを上げながらも、その腕は更に強く雅美を抱き締めていく。

雅美が上半身を彰子の胸から起こす。

そして彼女は、彰子の白い乳房にうつつら血を滲ませながら浮び上がった、自分の歯形を見詰める。

彰子が雅美を誘うかのように両脚を大きく開き、その割れた股間を雅美にさらけ出して見せる。

「して……」

雅美と彰子が互いの脚を胸に抱きかかえ、逆方向から太股を絡み付かせる。二人の女の淫らな松葉がベットの上で形作られ、前後から重なった股間の狭間で乱れ切った二つの秘部が密着する。雅美と彰子は触れ合したその瞬間、お互いの肉壁の感触と生暖かき、そして愛液のぬめりを感じた。

雅美が両手を彰子に向かって伸ばすと、彰子はその両手を握る。二人の女は、その繋いだ手をお互いに引く合うようにしながら、秘部をこすり合せ、腰を淫らに蠢かしはじめる。

二人の接合点から生じるぬめった肉音、ベッドの上げる微かな軋みの音、そしてそれに同調するかのようにならされる二人の女の息遣いの音。

雅美と彰子は、まるで男との交わりの時に見せるであろうような腰使いとなり、秘部をこね回し合う。

二人の女の密着した秘部がぬめりを吐き、その愛液が混ざり合う。そのぬめぬめとした感触と、互いの肉壁の肌触り、そして尖った陰核が擦れ合うその快感が女達を楽しませ、更にそこから快楽を引き出していく。

ベッドの軋みの音が大きくなる。

「ああいい、いいわ、こんなに、こんなにもいいなんて……」

彰子が快楽に酔った者の声を上げ、腰を押し付けるように細かく振り、秘部を強く雅美の秘部に擦りつける。

雅美もまた、その彰子の動きに応え、股間を微妙に振り、彰子の陰核に恥骨の盛り上がりを押し付けはじめる。

ベッドの上で二人の女が淫らに絡まり合うその様を、エンプーサが見詰めている。

黒猫は一切の感情が欠如したような銀盤の瞳をそのままに立ち上がり、しなやかな筋肉を充分に使い、一挙動でベッドの上に飛び上がる。

エンプーサは二人の女の淫らな動きによって揺れるベッドの上をゆっくりと歩き、仰向けに横

たわった、彰子の腹の上に乗った。

その時になって、ようやく彼女はエンプーサに気付き、閉じていた目を開く。だがその目もまた、雅美の秘部によって擦られる、自分の股間から生じる快樂に濁ったものであり、虚ろなものであった。

彰子が荒い息の中で呟く。

「エンプーサ……」

雅美が、彰子の手を掴んでいる片手を離し、エンプーサに手を差し伸べる。

エンプーサはその差し出しされた手に顔を擦りつけ、一声鳴声を上げた。

「お前も楽しみたいの？」

雅美がエンプーサに語りかけ、得られるはずも無い答えをその瞳から得る。

「お待ち……もう少しだけ……」

雅美が乱れる息の狭間から囁き、腰の動きを早める。

激しく身悶えする彰子の腹の上でエンプーサは、その身体の揺れも意にかけることなく、立ちつづけ、絶頂の際を求めて喘ぐ二人の女を見詰めつづける。

雅美と彰子がほぼ同時に達し、悲鳴のような声を絞り出した。

ぐったりと重なり合う二つの身体が離れ、雅美がエンプーサに物憂げな視線を向ける。そんな二人の女の股間は愛液に濡れ光り、重なり合っていた秘部が離れたときには、まるで水飴のような粘液が一瞬、その狭間を埋めた。

彰子が、二度目の絶頂によって体力を奪い尽くされてしまった身体を、ベッドの上に投出し、荒く、深い息をつく。

その息遣いによって、緩やかに上下する腹の上をエンプーサが、淫らに濡れ光る下腹部に向かって歩みはじめる。

それを見詰める雅美の瞳に冷酷な輝きが生じた。疲れきって力なく投げ出されている彰子の足首を彼女の手が掴み、割り開いて、大きく乳房に向かって折り曲げる。

「ひっ……」

彰子が低く悲鳴を上げた。

雅美は彰子の愛液にまみれ、乱れ切った秘部と、剥き出しにされる後孔とを見下ろす。

彰子の股間に向かって、歩み寄って来たエンプーサが顔を近づける。

「嫌っ……」

エンプーサのざらつく舌を秘部に受け、ぬめった粘膜を舐め上げられた時、彰子はその感触に恐怖の表情となり、声を上げる。

「いや、もうこれ以上は止めて……気が、気がおかしくなってしまう、止めて、もう、もうこれ以上……」



彰子の哀願を無視するように、エンプーサが秘部を舐めつづける。彰子が既に苦痛となった声を上げ、彰子に押さえつけられている両脚を振る。

「いいわよ狂ってしまったても、奥様。色に狂う女の姿、私に見せて……」

雅美が冷酷な笑いをとどめたまま、エンプーサが舐めつづけている彰子の股間に向けて顔を近づけていく。

エンプーサの舌先に、彰子の秘部から新たに漏れだした愛液が糸を引く。

雅美はそんな肉襞の下端に唇を当て、秘部と後孔との狭間の、狭い箇所唇を寄せ、歯を立てる。白い歯の間で、翳った肌色の女肉が強く噛み締められた時、彰子が苦痛の声を張り上げ、下腹部を震わせた。

雅美が顔のすぐ上の秘部から香りだす、強い雌の匂いを嗅ぐ。

雅美の歯が後孔に触れる。

寝室に甲高い悲鳴が響き、苦痛としか感じられないエンプーサの舌の動きと、雅美によって後孔を噛まれる痛みに、彰子の上げる声が高まっていく。

淫らな時間が経過する。

以下、次回へ